

在外研究の旅・1982年4月から1983年3月まで
——イギリスのOxfordと
アメリカのCambridgeにて——

藤 井 稔

その I Oxford (1982年4月～1983年9月)

Henry James — Oxford typifies to an American, the union of science and sense — of aspiration and ease. …… Oxford lends sweetness to labour and dignity to leisure. ——

1) Flaf 1, Hart Synott House,
Leckford Rood

何が幸いするかわからない。1982年4月中旬頃、息子の骨折事故で約一ヶ月遅れの日本出発の際に、イギリスとアルゼンチンとの間で起ったフォークランド紛争は悪化しつつあった。

心理学の研究でオックスフォード大から、D. Phil. (ディ. フィル. ここでは博士号を Ph. D. とはいわずこのように呼ぶ) を獲得したばかりの Yuko Kimura がわれわれの宿を捜しているのだが、St. John's College の家族寮にアルゼンチンの研究者が入る予定のところ、紛争のため来られなくなり空いているところをみつけてくれた。

St. John's College はオックスフォード大の中でも伝統のある(1555年創立)優秀なカレッジの一つで Yuko の直接の指導者 Paul Harris (日本の助教授格) がこのカレッジに属していることから、このフラット(イギリスではアパートのことをこう呼ぶ)が当たったというわけである。オックスフォードでは子ども連れの宿

捜しはなかなか大変だという中で、まずは幸運な出だしであった。ベッドルームが一つと居間が一つとで四人家族には少し狭いが、生活するにはそれほど困らない広さであった。屋賃も6万円ほどでここではそれほど高くない。家具はほとんど備えつけであるが、足りないもの、例えばキャンピングベット、毛布、キャンピング用食器などは心理学のピーター・ブライアント教授が借してくれた。

到着した日とその翌日に、Yuko がオックスフォードの街を案内してくれた。銀行の口座設定、種々の店、マーケット、デパート、スーパー、それに休日でも開いている店などを彼女が手際よく教えてくれたので、われわれだけなら、おそらく1ヶ月ほどかかることが2日で出来たことも、短い滞在期間においては幸いであった。

われわれのフラットは一階で、子どもが2,30人は充分遊べるほどの広い芝生の庭があり、その隅には大きなクルミの木が丁度芽を吹き出し、ときどきリスが訪れ、ブラック・バードが群をなして階上から落されるパンくずをついばんで

いる。

天気の良い日にはその庭に数家族が出てきて、肌を焼いたりしながら、ケーキを食べたり、お茶を飲んだりしながら団らんするのであった。この住人は皆、なんらかの形で St. John's College に属している者とその家族であり、数人のイギリス人（主人はイギリス人でも奥さんはポーランド人とかカナダ人の家族もいる）を除いては、デンマーク、フランス、カナダ、メキシコ、ブラジル、アメリカなどからの留学生達とその家族である。

荷物の整理をしているとイギリス人の工学系の院生とインフォメーション・センターに勤めるポーランド人の奥さんが庭から声をかけてきた。エンジニアの彼は「部屋の暖房設備の操作が複雑で住人から、しばしば質問されるので遂に説明書を作った」といって、そのコピーをくれた。そして一軒おいて隣の彼らのフラットに連れていかれ、このテレビは日本製だ、この時計も、これもこれも日本製だと次々に品物を指さしながらいった。後に自転車のスパナを借りたら、これも made in Japan であった。

一般に日本に対する関心は大変高く、丁度その頃 B.B.C. のテレビで戦後の日本のおどろくべき経済、技術の発展に関する放送を連続して特集しているときでもあった。

Judo の教室・鈴木メソッドのバイオリン教室（ブライアント教授の9才の娘も習っていた）などもある。

2) Department of Experimental Psychology

心理学の建物は自然科学系の建物の並ぶ一角にあり、コンクリートむき出しの、モダンなものであり、他の建物がレンガ造りの古いもの、例えば筋向いにある、私の家内の属していた植

物学の建物が中世の城のようなものであるのと比べて対照的である。これは1971年に建てられたもので、動物学と一緒にいる（ノーベル賞受賞者の N. Tinbergen はまだそこに部屋をもっていた）。

ここでは地階は A Level, 1, 2, 3 階はそれぞれ B, C, D Level と呼ばれている。

A Level には階段教室があり、講義は主としてここで行われる。B Level には図書館とテクニシャンと呼ばれる人々が実験用の機械器具を製作したり、調整したりしている部屋がある。C Level にはゼミ教室とロビーがあり、そこにはスナック・バーがあって、午前午後の二回のコーヒー・ブレイク、あるいはティー・タイムには飲みものがサービスされ、昼食には軽食が作られる。学生のほとんどは昼食時には自分の属するカレッジの食堂で昼食をとるようで、このロビーを利用するのは主として研究者・院生である。コーヒー・ブレイクには研究室にいるもののほとんどがロビーに出てきて、種々の情報の交換をする。それ以外の時間にはそれぞれの仕事をして、他の人との交渉はほとんどなされない。

D Level にはスタッフの部屋があり、外からの研究者、院生はほとんどが数人の合部屋である。

私の部屋はブライアント教授の前にあり、秘書のハモンドさんの部屋の隣にある。数人が入れるようになっているが、丁度そのときはブライアント教授の研究を手伝っているモーラック嬢と一緒にあった。彼女の名はスコットランド系のものであり、彼女はスコットランドで生れて、ウェールズから、イングランドに移り、ロンドン大学を卒業している。ここで得た金をもとにして、ソシアル・ワーカーの資格をとるための勉強をするということであった。こころ

よい鈴のような響きの英語はその顔とともに
“lovely”であった。

後に、同じイギリス国内でも、ことにイングランドとスコットランドとは対抗しあっている（お金の文様も異なる）のを知って、彼女にスコットランドとイングランドとウェールズといずれが一番好きかと聞いたら、それは答えられないとかわされてしまった。

ここオックスフォードではこちらから話しかけない限り、相手から話してくることはほとんどない（そのためこの人達は冷たいという人もいるが）が、こちらから話しかけるとその質問については親切に答えてくれる。モーラック嬢も同様で、寒暖計はどこで買えるか、市場の肉屋ではどこがよいか、どんな肉が安くてうまいか（一般にイギリス人はしまり屋ですこしでも高い値のものについては、Oh! terrible! とか expensive! とかいう）という具合に質問しながら会話の練習をした。しばらくすると「英語がだいぶ上手になった」などとお世辞をいわれた。

しばらく慣れてから、彼女は現在進行中の児童の読書障害の研究をみせてくれると約束したのに当日になったら、あれはもう終わったのでみせられないといわれた。ここではときどき、このような不可解なことが起る。建物は新しいが事はなかなかスムーズにははこばないことがあるようだ。

D Levelの上には動物実験室があり、許可なくしては入れないことになっている。

3) Watts Professor Peter Bryant

オックスフォード大では各学科には原則として教授は一人しかいないが、ときには有力者が講座を寄附することがあり、そのときにはその人の名を冠した Professor が誕生する。心理学

でも Watts 夫人の名をとった Watts professor というのが正教授 (L. Weiskrantz) の他に一人いる。オックスフォードの教授は大変権威のあるものだということはよくきかされた。

Peter Bryant は Jerome Bruner の後任として Watts Professor になったばかりであった。彼が私を招いてくれたわけだが、正式には教授会の承認が必要となる。ここには世界、各国とくに旧英国領からの応募者が多いので招待されないこともあるときいていたが幸いにも前年の10月の教授会で承認された。

有名な D. Broadbent もここに研究室があるが彼は外部の医系のメンバーだということである。

教員スタッフは全員で30名ほどである。

ピーター（研究室では学生でも教授の名を first name で呼ぶ。ただし秘書のハモンドさんは私のことを終始 Professor Fujii と呼び、Visiting Professor Fujii と他人に紹介した）は Watts Professor になる前には St. John's College に属し、Bruner の後任になってからは Bruner の属していた Wolfson College のメンバーになった。彼の最初の弟子 Paul Harris はピーターの後任として St. John's College のメンバーになった。先述の Broadbent、それに社会心理学者の M. Argyle も Wolfson College のメンバーである。

ピーターは発達心理学、知覚発達、知覚学習、認知発達、概念形成、弁別学習、児童の読み、書きとその障害に関して研究している。1983年に創刊される British Journal of Developmental Psychology の編集長となるはずであり（現在発刊されている）、Yuko の論文もそれに掲載されることになっていた。

4) 講義

講義は主として A Level の階段教室で行われる。

聴講生は主として学部学生で（ときには老男・女が聴きにきていることもある）8割以上が女子学生であり、ことに発達に関する講義は生理学に関する講義に比べて女子学生が多い。

主な講義に一時間ずつ出席してみたが特徴的なのはピーターのもので、コーヒーカップを演台に置いて、ときどき飲みながら、演壇一杯に動きまわり、体全体を動かして早口でしゃべりまくり、全く精力的な講義である。それに対して学生も熱心に反応しているようで絶えず笑いが起る。

学生は一般にどの講義でも極めて克明にノートをとっている。

社会心理学者の Argyle はそれと対照的に（コーヒーを持参している点と同じだが）、椅子に座って原稿をみながら、ゆっくりしゃべり、自分の講義を手持ちのテープレコーダーに録音している。

Paul Harris はやはり発達の講義だがこれはゆっくりと学生にわかるようにしていねいにしゃべる。

5) セミナー

主なものは次の三つで、一つは学科のもの（主任教授の Weiskranz 主催）、一つは発達のもの（ピーターの主催）、残る一つは社会心理学のもの（Argyle 主催）である。それぞれ週一回定期的に、夕方4時頃から、C Level のセミナー室で開かれる（この部屋には前任の教授達や外国からきた有名な講演者の写真が壁にかけられている。）セミナーの始まる時間は決まっているが終りは特に決っておらずときには遅くなることもあるが、たいていは6時頃には終る。

それぞれのセミナーではだれか一人が最新の研究の発表をし、それについてディスカッションする。講演者は主として外国からの Visitor か、イギリスの他の大学の人々である。それにこのスタッフが加わることもある。一学期8週間分の講演予定は予め決まっているが一・二回はとび入り用にあけてある場合もある。学科のセミナーは実験的なものが多いがそれには発達のなものも入っている。

発達のセミナーはもちろん発達に関するものが中心であるが自閉症、障害児の研究も入っている。

自閉症のセミナーの発表者はロンドンから来た若い研究者であった。彼はセミナーの始まる前に私の部屋を訪れ、ロンドンにいる Lona Wing（彼女の本は邦訳されている）を訪ねることをすすめた。彼女は日本を訪問したこともあり、ロンドン近郊の自閉症児の学校を案内してくれるだろうとのことであったが、これは時間がなく果せなかった。このセミナーに出席した G. Flanagan 女史はこの研究室に属し、自閉症のフィルムを持っているのでみせてあげるということであったが、彼女は病身で研究室に顔を出したのは遂にこの一回だけであった。しかし同じ席にここを卒業してから、Reading（レディング）大学で学位をとった John Richir がおり、彼は車で20分ほどいったところにある Park Hospital に勤めて自閉症の治療をしているとのことであった。彼はその後、彼の病院でのセミナーで自分の扱っている自閉症児のフィルムを見せてくれた。その時の出席者からの指摘はその児は本当に自閉症なのか、あまりにも軽症だということであったが、私も同感であった。その後で彼は論文を送ってくれ、また昼食をともにしたいということで大学の近くのパブでランチを食べながら議論をした。彼の立場は行動学

的なものであり、「それはTinbergenと同じではないか」といったら、彼はむきになって、「Tinbergenのはだめだ、自分のは彼のとはちがう」といって、彼は治療に際しては子どもと一番長く接触している母親の教育が一番大切だという。それに対して私は母親はこちらのいうことがなかなか理解できないので、まず当の子どもとわれわれとの間のコミュニケーションを可能にすることが最初にやるべきことだと主張して、その内に私の論文を送ると約束した。それから研究室で毎日タイプをたたいてどうにか要旨の英訳をして彼をはじめピーターや他のスタッフに手渡してきた。日本からとどいたビデオテープは残念ながら方式が異なり、みせることが出来なかった。

話が横道にそれたが、社会心理学のセミナーには精神医学的な臨床に関するものがいくつかあったのは意外であった。

以上のセミナーでの発表はさすがに経験論のお国柄だけあって、実験・臨床など実証的なものであった。

これらのセミナーには教授をはじめ研究室に属するものの多くが参加し、また近隣（ロンドンもそれに入るが）の大学、病院などからも参加者があった。

以上のようなセミナー以外に、外国やイギリスの他大学から来た人を囲んだセミナーがその都度にかかれる。これらは主として、ランチ・タイムに行われ、それぞれがサンドウィッチなどの軽食を持参して（ピーターなどはトマトを数個もってきて丸ごと食べながら、これが私のランチだという）討論する。

また夕方に院生主催のセミナーもあり、これにはお金をとられる（約80円）。このお金は講師に支払われるらしい。知覚研究の有名なGregoryの講演をこの席で聞いた。

定例の場合であれ、不定期のものであれ、夕方のセミナーではワインがふるまわれることがある。

講義や講演やセミナーは学科以外で、例えばカレッジや他の学科で開かれているものもある。それらの目録は大学事務局で手に入れることができる。

Wolfson College（ピーターなどの属しているカレッジ）などでもときどき心理学の講演やセミナーが開かれる。J. Brunerの主催するWolfson Collegeでの講義は出版され、邦訳もされている（Human Growth and Development, 1976）。

講義への出席は原則として大学事務局でお金を払って手続きするようだが、もぐりでも聞くことは出来る。私の家内などは植物学のDr. Clauesとともにアシュモレアン博物館（オックスフォードにはいくつかの博物館があるがこれは最大で大英博物館ほどではないが多くの貴重な収集品を蔵している。中国、日本などのものも多い）で夕方から開かれる美術の講義に出席していた。Claues博士によると、オックスフォードの住人はだれでも大学のメンバーと考えてもよいから、どの講義でも聞くことが出来るということであった。

6) 食事への招待

1) カレッジでのランチ

到着後まもなく、ピーターが彼の属するWolfson Collegeのランチに招待してくれた。

カレッジの食堂でセルフサービスで自分の好きなものを運んでくる。彼の奥さんが丁度イタリア旅行中で、その内に自宅に招待するとのことであった。中学生のナオミと小学生のエンマの二人の娘も一緒に、後に長男の高校生ダニエルが加わった。

ランチの後、コーヒーを手にしながら、カレッジを案内してくれた。

このカレッジは1974年に開設された新しいカレッジで、大学院生と外国から研究者達のためのカレッジである。モダンな建物だが美しい庭とよく調和し、テムズ川に注ぎこむチャウエル川を庭に引き込んで、庭から Punt (平底舟で長いポールを使って動かす)を用いて punting することが出来る。

彼は庭に咲いている花や廊下に置かれている花をさして、さかんに“lovely”だろうと自慢げであった。

ii) ピーターの自宅でのランチ

ピーターのところもわれわれのところも子ども達がいるので、彼はランチに一家を招待してくれた。奥さんはすでに子ども達の学芸会の席で逢っていた。病院でケース・ワーカーをしているとのことであった。

食事は時間をかけて焼いたロースト・ポークがメインであり、ピーターがナイフを入れた。それにかけるソースが珍しいので自分でつくったのかと聞いたら、セインズベリー(スーパーの名)製だとのこと。ブドウ酒もアイスクリームも同製のものであった。買い物は週に数回朝早くピーターが車でセインズベリーに行ってくるとのことであった。

食後、森へ連れて行ってやろうと彼の運転で、エンマを連れて、少しはなれた岡に登っていった。止ったところには大きな木で組み合わされた門があり、彼がその鍵をあけて森の中へ入った。

この森は彼が前に属していた St. John's College の所有のもので、彼はまだ鍵を持っているらしい。森の中の小径をしばらく歩くと二・三家族に出逢った。このカレッジの関係者はときどきこのように森を散策するらしい。

その内に、確かここらあたりだがといて、しばらく探してから、彼の目的地に着いた。そこにはみごとなロードデンドロン(しゃくなげ)の花が丁度盛りであった。森の中で自然に生えているこの花を私たちに見せたかったらしい。さかんに“lovely”だろうと同意を求めた。

「京都には哲学の径というのがあるが、ここオックスフォードではどこでも思索に耽る自然の環境に恵まれていますね。」といったら、彼は「思索は主に大学でし、ここでは気分転換をするのです。」といった。

iii) カレッジのディナー

Wolfson College のディナーへの招待のときは、子どもは同伴できないということで私一人招かれた。いつもノー・ネクタイのラフな服装をして研究室に通っていたが(ここでは服装は全く自由である)、このときだけはネクタイはしめてくるようにといわれた。初めは車で pick up してやるとのことであったが、時間になっても迎えにこない。奥さんが車を使っているのだろうと思っていたら、案の定自転車で行こうという。彼は全速力で走るが私も負けじと後を追う。オックスフォードでは自動車も多いが、未だ自転車優先のところもあり、曲るときには後を振り向かず曲る方向を、手を大きく横に挙げて示せば、自動車は自転車の曲るのを優先してくれる。慣れないと少々こわいが、ピーターは全速力で走ってこれをやるので、私もそれに倣う。ディナーの時間には丁度間に合った。彼は支えのある自転車に私の自転車をもたらせて、鎖で一緒に結んで(自転車には一般に支えがない)、「これで日英合体！」とにこりとした。

まず、カクテルでお互の挨拶が始まり、次いで食堂で定められた席についた。その日は Yuko と Dr. Lynette Bradley 女史とが同席した。Yuko と私とは招待客でピーターとリネットと

はともにこのカレッジのメンバーであり、メンバーはこのようなディナーに数人の知人を招待出来る。

初めに全員が起立し、誰かが一言挨拶してから、食事が始まった。服装はネクタイ着用ということ以外は平服で、女性もとくに正装はしていない。後に私たちの息子たちにボランティアとして英語を教えてくれた St. John's College に属して法律を勉強している女子学生がやはりカレッジのディナーに招いてくれたが、そこでは教授は角帽にガウン、学生もそれぞれの格に応じたガウン（女子学生も同様）を着ていたのと比べるとここ Wolfson College ではその建物と同様、規律も新しいものようであった。

ランチとは異なり、食事はウエイトレスがサービスしてくれるが、食事が運ばれるたびに、“サンキュー”という。

ワインも入って皆もだんだん弁が立つようになる。Yuko は教育学部の研究生との間でフォークランド紛争のことではなばなしい論戦をくりひろげている。Yuko は負けずに大声で話すとともに早口で話はほとんどわからない。

食後は別室のバーへ移り、そこでコーヒーを飲みながら話が続く。私は先述の教育学部の研究生と話しはじめたら、彼は高校でフランス語を教えており、休暇をとってここへ来ているということであった。Yuko との論戦のときはほとんどわからなかった彼の英語は今度はとてもわかりやすい。だいたい大学の先生を除いて小・中・高校の先生の英語はわかりやすい。彼のいうにはよい英語には Queen's English, Standard English (B.B.C. の英語)、と Oxford Prestige English (上流階級の英語)とがあり、この三者はだいたい同じであると教えてくれた。

私が障害児の研究をしているといったら、“Warnock Report”を是非よめという。これは

日本の文部大臣に当る大臣であったサッチャー女史による特殊教育改良に関する諮問にもとづき(1973. 11)設置された「障害児・青年の教育に関する調査委員会(委員長 H. M. Warnock)」の報告書である。委員長のウォーノック女史はここオックスフォードの高校の先生であり、主人は大学のスタッフだということで、一度逢ってみたらといわれた。

この報告書での提言はイギリスでは高い評価を受けているが(その後、このことに関して聞いた人々はいずれも同じことをいった)、現在、お金がなくてまだ実施できないでいる。それなのにフォークランド紛争には金を使ってとまたまたこの問題にもどって来た。

その頃はテレビのニュースは朝から晩までこの問題一色で、イギリスでは他国のことなど放送しないのかと思ったほどであるが、紛争解決後は日本と同じようなニュースの放送になった。

夜11時、おひらきとなって、ピーターとは少し方角が違うから、別々に帰えることにしたが、私の自転車にはライトがないので彼は自分のを抜き取って借してくれた。“Good night/”。ここへ来て初めて聞いたことばだ。それまでは別れのことばはほとんど“See you tomorrow/”あるいは“See you again/”であったから。

IV) ユーコとモーラックとの送別会

モーラックは9月で契約が切れて、それから social worker の資格を取るために、ここを去るということ、ユーコも日本へ帰る決心をしたことで二人の送別会をピーター主催で中華料理屋で開くことになった。研究室に属するもの10数名と私たち二人も招かれた(ただしワリカンで)。皆上手に箸を使う。9時頃にそこを出て、Dr. Paul Harris の家で二次会が開かれた。その家は St. John's College の敷地の一角にあり、古い塀の中の新しい建物である。ワインが

沢山冷やされており、彼好みのアフリカの音楽に合わせてそれぞれがディスコを踊り始める。ピーターも奥さんもあまり上手ではないが踊っている。私はワインを飲みながら、じっとみているだけ。ピーターの奥さんはなぜあなたのwifeを連れてこなかったのかという。一人ではつんとしているとモーラックやリネットの主人（歯医者）が話しかけてくれる。12時頃に一人で先に帰った。

V) リネットの家でのディナー

Dr. Lynette Bradley, 彼女はピーターとともに児童の読書障害とその教育訓練を行っており“Nature”誌に彼女がfirst nameで論文を発表している。彼女の主人とはモーラックとユーコとの送別会で知り合ったが、彼がわれわれを招待したいと申し出た。しかし私の母の急逝で一時帰国しなければならなかったもので、果せないままでした。イギリスを離れる少し前に研究室に訪ねてきたその彼が、今夜こないかというので、それではとでかけた。

彼らは二人ともオーストラリア人で年頃の息子、娘を一人ずつ持っている。リネットが車でわれわれ四人をピックアップしてくれて、オックスフォードの古い村などを案内してくれながら、遠まわりをして、St. John's Collegeの森の近くの、岡の斜面を庭にしたプール付きの大邸宅に連れて来られた。気楽に夕食を食べながら談笑した。主人が日本では男性優位だということだがというので、私は「小さい頃新聞でブロンディーというマンガを読んでいたが、少しも面白くなかった。しかし今や私はダグッドだ」といったら、主人はひざをたたいて大笑いして、別室で私の家内と談笑していた奥さんにも笑いながらそのことを説明した。リネットがいうにはオーストラリアでは今でも男性優位であるが、ここオックスフォードでは全く男女平

等だ。「私はそのような環境にはすぐに慣れることが出来た」と笑った。

彼女の話のように私のみだりではほとんどすべての点で男女全く平等で、よくいわれるlady firstということすらあまりみられず、例えば女性が重い荷物をもっているような状況でも男は傍で見ているだけで助けようともしないという光景を見たことがあるし、私自身も研究室で重い書類を持って私の部屋に来る女性を助けようとしたら断わられたことがある。

一般に、オックスフォードではこちらから質問しないかぎり、相手からの反応はないが、リネットはその点、イギリス人でないせいか大変親切なところがある。例えば到着早々、ボードレアン図書館（古く、多くの奇書を所有している有名な図書館）へ入るチケットの求め方を教えてくれたり、大学公園のアヒルの卵がかえった頃だから、行ってみないかと誘われたりした。研究についてのディスカッションもよくするが、自分自身の研究についてはそれが論文として発表予定が決まるまでは極めて警戒的で、モーラックが実験を見せてくれる予定が変更されたのは彼女のさしがねらしい。

7) 食事への招待

夏期休暇に入る頃にピーター一家をランチに招待した。ピーターは国際心理学会が日本で開かれたとき（1972年）に、日本に来たことがある。多分のり巻きのすしが出るだろうと予想してきたが私たちはその予想通り、のりまきと玉子スープと肉だんごのシチュー（セインズベリー製）を出したが、玉子スープ（この味付けは日本から持参しただしの素でした）がおいしいとほめられた。

来年大学に進学するという長男のダニエルは夏休みに一家で南フランスの借し別荘に行くの

に自転車で行くのだといって新品の十段ギアの自転車をみせてくれた。ピーターも同じものを購入し、息子と二人でフランス到着後（イギリスの自動車には自転車を乗せる専用の貨車が付いている）、自転車旅行をするのだそうだ（奥さんと他の娘二人は自動車旅行）。その練習のため昨日ブレナム・パレス（チャーチルの生家ここから車で30分程のところ）まで往復して、疲れていた。こんなことぐらいで疲れるのではフランス旅行が思いやられると奥さんにひやかされていた。またギヤが十段変速であることも秘書のハモンドさんにひやかされるもとであった。

しかしこの旅行は成功だったようで、200マイル旅行したところから、絵ハガキを送ってくれ、それには目的地まで約半分来たとかかれてあった。

庭のクルミの木の芽が吹き出した頃に到着してから、その木の実がかたくなり、葉の落ちる頃にオックスフォードを去って、次の地、アメリカのケムブリッジへ渡ることになった。不思議の国のアリスの書かれたときと変わらないテムズ川沿いのメドウによく出かけたが、そこにいと異国にいる淋しさよりむしろ離れがたい懐しさを感じた。

そのII Cambridge (1982年9月～1983年3月)

William James — The community stagnates without the impulse of the individual. The impulse dies away without the sympathy of the community.

1) 20 Fernald Drive, #12, Cambridge, Massachusetts

ハーバート大学が建てられたのは、ピューリタンを乗せたメイ・フラワーII世号がアメリカのプリマスに到着してから、わずか20年足らずである(1636年)。その名の由来する John Harvard はイギリスのケムブリッジ大のエマニュエル・カレッジの出身で、この地に移住した多くの人々がケムブリッジから来たところから、この地もケムブリッジと名付けられた。われわれのアパートのあたりは通称 Botanic Garden

と呼ばれ、ベッドルームが2つとオックスフォードの場合より広いが、大学の管理するアパートにしては屋賃が約15万円と民間のそれにくらべても高い。しかも冷蔵庫とガスレンジ以外はなにもなく、電燈もここではほとんどがコンセントから引いたスタンドでつける。

初めは、ハーバート大学の子ども病院の主任研究員をしている松宮博士が貸してくれた毛布などでごろ寝をし、食卓は荷物のダンボールというありさまであった。

東大の大学院生で、M. I. T. の R. Held の下で

研究している下条君に伴われて、とにかくマットと毛布、テーブルと椅子などを買い求めた。丁度移動の時期だと、先住者達のお古を買い求めることが出来たのだが、少しタイミングがずれ、結局新品を購入せざるを得なかった。それでもなんとか最低限の生活をする用意が出来た。これらの点はオックスフォードの場合と異なり、大いにとまどった。

買い物は初めは松宮博士が車でスーパーへ連れていってくれたが、車のないわれわれは後には買い物用の車を引いて、リュックを背負い、買いだしに出かけた。

アパートのあたりは第二次大戦直後までは大学の植物園であったので(前の通りはリンネの名をとってリネアン通りという)、木も多く、リスもしばしば訪れる閑静なところであった。

大学の研究室へは歩いて15分程、学バス(shuttle bus)では5分程で行ける。

アメリカはことにベトナム戦争以後、どこでも物騒になったが、「ケムブリッジも、もはや安全ではない。」ということはオックスフォード滞在中に、アメリカ人をはじめ諸外国人からおどかされていた。

2) Department of Psychology and Social Relations

カーランド通りにある15階建てのモダンな建物は、他の古いレンガ造りの建物と比べて一際めだつものである。近くにある経済系の建物にいる留学生達は「あの建物は周囲のひんしゅくを買っている。」とやっかみ半分にいうものもある。

このような建物はオックスフォード大の場合と同様、心理学の隆盛を示すものなのかもしれない。

アメリカの心理学の父であり、ハーバート大

の初代の教授の名をとって William James Hall と呼ばれる (W. J. ホール)。ドアをあけて入口を入るとエレベーターの上に先に示した W. James の文が書かれている。エレベーターの左側にはスタッフの名札があり、R. Brown, Estes, J. Kagan, Dunkan Luce, B. F. Skinner などと並んで F の項に M. Fujii と書かれている。私を招いてくれた Jerome Kagan はそういう点でも気のつく人で ID カード (大学在籍証明書) もすでに用意されていた (通常このカードを取得するのに一ヶ月ほどかかると聞いていた)。

私の部屋は最上階15階の Kagan 教授の隣りの1500室で、それは visiting professor 用の一人部屋であり、他の階に比べて天井も高い。他の日本人の留学生の多くが合部屋なので、彼らからはうらやましがられた。

電話も部屋にひけるようになっていたが、Kagan の秘書がすべて取り継いでくれる。

私の部屋のすぐ向い側には小さな Hall があり、私が到着してからしばらくして W. James の大きな肖像画がかけられた (彼の孫が所有していたもの)。そこでは教授会や、公開セミナーなどが開かれ、ときにはパーティーにも使用される。例えば Kagan の誕生パーティーが彼の研究室に属するもの10数名で開かれ、パーティー、バースデーの歌で彼を迎え入れ、やや大きめのアイスクリームを切って皆で食べて、モツアールトのカセット・テープを二本お祝いに贈った。私は毛筆でお祝いのことばを日本語で書いてあげたら、大変喜んでくれた (慧眼先生へ)。しかし忙しい中でのこと約30分でおひらきになった。簡単ではあるが心のこもったお祝いの仕方である。

この Hall からは対岸の Boston が一望でき、ことに夕焼けと Boston の夜景は美しい。

Department の名の通り、この建物には心理

学以外に文化人類学や社会学のスタッフも入っている。

6階のセミナー用の部屋には歴代の Professor の写真 (James, Münsterberg, Yerkes, Langfeld, McDougall, Troland, Pratt, Center, Lashley, Boring, G. A. Miller, Békésy (ノーベル賞受賞者)、Bruner, Stevens) とここで講義した人々の写真 (Dewey, Köhler, Thorndike, Beach, J. R. Oppenheimer, Lindley, Simon, Land, Broadbent) が掲げられている。いずれも世界的に有名な人達である。なお 1981 年にノーベル賞を受賞した Hubel と Wiesel は生物学の部門に属している。

3) セミナー

講義には出席しなかったが、ジェリー (Kagan の愛称、ここでも学生はじめ皆がそう呼んでいる) のセミナーには丁度 9 月の学期初めから 12 月まではほとんど出席した。R. Brown のセミナーには翌年の 2 月、第二学期の初めに二回ほど出席した。

ジェリーは 2 時間中ほとんどぶっつけにしゃべりまくる。出席者の一人にろうの女子の院生がおり、ジェリーの隣りの席 (テーブルは大きな楕円形である) に坐った手話通訳者が一語一句通訳している。「二時間続けての通訳は疲れるであろうから途中で一休みして下さい。」というろう学生の要求で、一時間で 10 分の休みをとることにした。ジェリーはろう学生のために特に配慮してしゃべるわけではなく、オックスフォードのピーターと同様、彼も早口でまくしたてる。ときどき手話通訳者がわからない固有名詞がでてきたときなどに、通訳者が “Excuse me!” といって聞きなおすぐらいである。質問も出るが、思ったよりは質問の数が少ない。ただカルフォルニアのバークレイから来た

女子院生のアリソンだけはさかんにくいっていた。アメリカの東部と西部とのちがいであろうか。

Brown のセミナーに出席したのは彼に頼まれて彼の仕事を手伝ったためである。動詞の意味を日本人はどうとらえるかを調べることで、私は英文を訳して日本人の被験者 (主として日本人学校の父母) を相手に data をとってあげた。セミナーは初回到私のとった data をもとに国と国との比較を論じたが、他の週は彼のもとで研究した人々が、それぞれ一回ずつ受持って新しい研究を発表するようである。3 月頃には自閉児の言語行動についての発表予定があったが私の帰国後のことで出席できなかった。しかしこの発表者は Brown を通じてすでに知り合いになっていた。彼女はロンドン大学出身で、L. Wing, M. Rutter のことなどもよく知っており、学位論文も Brown の指導の下に自閉児について書き、その後の研究論文の抜き刷を数冊くれた。現在は近くのマサチューセッツ大学の教授になっており、小さな子どもを持っているのでなかなか大変だということだった。彼女は Boston にある自閉児の学校を二つ紹介してくれた。

以上の定例のセミナー以外に、ランチ・タイムのセミナー (例えば Estes の主催する Cognitive Lunch) や夕方からのセミナーが心理学の事務当局から発行される週刊ニュースにのせられる。これにはオックスフォードの場合と同じく外国や他大学からの講演者が来る。近くの M. I. T. でも金曜日には公開のセミナーがある。ここでは出席者にコーヒーとドーナツとが供せられる。このようなセミナーの講演者は比較的若い人が多く (ときには Skinner が講演することもあるが)、ほとんど皆が緊張してしゃべっているような感じを受けるのはオックスフォードの場合のように若い人でもリラックスして

しゃべるのとはかなり違うようだ。

4) 実験

ジェリーはいくつかのプロジェクトをもち、それに対する研究費(grant)をもらい、その研究を10数人の研究員(学位取得者、学位論文を書いている者、それから院生、院生を目指している者など)とともにやっている。

彼のプロジェクトの一つは感情の発達に関するもので、実験室に3,4才の子ども二人を入れ、それぞれの両親は子どもへの積極的な働きかけはしないで実験室内のソファーに坐っている。

二人の子どもたちが相互にどのように関係するか、また親達とどのように関係するかなどを隣室からハーフミラーを通して観察し、チェックリストにチェックし、ビデオで録画する。それらの記録は後で分析される。さらに別室で心拍数、呼吸数などを記録する。丁度それらのデータをパターン化して処理するプログラムの試験操作に成功して、手をたたいて喜んでいるジェリーに向かって、「結果の解釈もコンピューターでできるか」と聞いたら「いや、それは出来ない」というので「それはここでやるのだろう。」と頭を指でたたいてみせたら、「うん、そうだ」と彼も同じしぐさをして笑った。生理学的状態がそのときどきの課題でどのように変化するかを調べて、行動観察の結果とあわせて感情の発達に関する研究をすすめている。その実験ではジェリー自身が陣頭指揮をして観察しながらそれを録音しておき、後で分析する。私も被験者のくる日・時を聞いて、できるだけ実験に参加し、子どもの観察と、実験のすすめ方の観察とを行った。

週一、二回は実験についての討論を私の部屋の向い側のホールなどで、研究員のほとんどが集って行う。

皆が種々意見を出すなかで結局はジェリーのいうとおりに決っていく過程をみて、これがアメリカの民主主義なのだろうと思った(ホワイト・ハウスにはだれでも入ることが出来るが結局は大統領の考えるように政治がすすめられるのがアメリカの民主主義だといった人がいる)。しかしこのような実験のすすめ方はオックスフォードではみられなかっただけに大変参考にもなり、うらやましくも思った。ここでも女性が多い。とくにジェリーの研究室では主任格の Dr. Steve Reznick 以外はすべて女性であった。また R. Brown のセミナーも8割以上が女性であった。

5) パーティーへの招待

1) ジェリーのディナー

「ディナーに招待しましょう。」とジェリーにいわれたが、主任研究員のスティーブが「私がピックアップしてあげるが、今晚は子どもは連れていけない。」といわれたので、息子達に留守番を頼んだ。ここではもし親の留守中に事故があると親の責任が厳しく問われるとのことだったが、見知らぬ人を頼むよりはいいだろうと二人を残してスティーブの車に同乗した。

その夕は数理心理学者の Estes 教授夫妻、同じ数理心理学者の Dunkan Luce 教授とそのガールフレンドと称する女性、生物学者の Bogorad 教授夫妻(彼は全米一の研究費とスタッフを有するという。私の家内が彼のもとで研究しており、ジェリーの友人でもある)、それに北京から留学している Yufu が招かれていた。

正式のディナーの後、飲みものを飲みながらいろいろと雑談をした。スティーブが「実は私のワイフはジェリーの一人娘で、最近結婚したばかりだ、彼女は夕方からも仕事で忙しいので今日は欠席した。」といった。Estes の奥さんも

心理学者で B. F. Skinner のもとで学位を得たそう
だ。専門は児童心理学で今は職はもっていないが
W. J. ホールではよくみかける。R. Brown
のセミナーにも出席して、いつも一言いう。そ
こでスキナーの二番目の娘デボラをスキナーが
自作のゆりかごで育てたことについて聞いたら、
あれは大変よくできており、育児の雑誌にも紹
介され、その後何人かの人々がそれで育てたとの
ことであった。デボラは現在は画家で、結婚し
てロンドンに住んでいるが、彼女の絵はハーバ
ートの生協の絵画部でときどき売られていると
いうことであった。Estes 夫人自身は Skinner
の上の娘を被験者として用いたそうで、彼女は
今は心理学者だそうである。

ii) W. J. ホールでのクリスマス・パーティー

W. J. ホールでのクリスマス・パーティーは例
の私の部屋の向い側の小ホールで開かれたが、
多くの人々が集ってきて身動きならないほどで
あった。そこで“エッグ・ノック”というカク
テル(このようなときよく作られる)を初めて
飲んだ。大変大きなボールに作られているので
皆もおかわりする内にかなり口がまわるよう
になった。パークレイ出身のアリソンは帰りに
パークレイによるならいろいろ教えてあげると
いつてくれた。彼女の父親も心理学の教授であ
り、その後帰国時にパークレーに一週間程滞在
したいといったら、会うことをすすめる教授、
訪れるべき大学内の施設、観光場所のことなど
実に綿密な計画をたててくれ、その上ホテルの
予約までしてくれた。

iii) Estes 家でのクリスマス・パーティー

クリスマス・パーティーに招待されたその日
は、丁度われわれの経験した第一回目の大雪の
日で W. J. ホールの近くの Estes 家へは、車のな
いわれわれは雪道を歩いてでかけた。途中時間
に遅れそうになったので、電話をしてから到着

したら、客はほとんど来ておらず、その代り、
Skinner 夫妻が丁度帰えりかけていた。まえに
述べたように B. F. Skinner は Estes の奥さんの
先生でもあるが、皆が集ったところでは疲れる
ので少し早めに来て早く引きあげるのだろう。
彼の方から握手を求めてきたので、その内あな
たの研究室を訪ねたいがといったら、どうぞど
うぞと大変愛想がいい。実は W. J. ホールのエレ
ベーターではよく同乗し、多分 Skinner だろう
と思っていたが声はかけないでいた。彼は W. J.
ホールの中にまだ自分の部屋と秘書を持ち、一
日中忙しそうに書きものをしている。義務はな
いらしくときどき M. I. T. で講演したり、新入
生相手に講演したりしている。

その内に客が次第に集って来た。Estes が数
理心理学者のためか、M. I. T. の統計関係の人
が数人来た。M. I. T. はハーバート大の近く
にあるがスタッフの性格は大変違うということだ。
M. I. T. の教授はかなりフランクにつきあえるが、
ハーバートの教授は権威主義的で、appointme
nt なしにはほとんど会えないし、会っても面会
時間は数分だとか留学生達はよく悪口をいう。
アメリカ人の学生でも“ハーバートは not frien
dly だろう”などとそっとささやくこともある
くらいだ。私はその点例外的にいろいろな教授
と接することが出来たが、ことにジェリーは秘
書が気にしても、いつでも心よく話をしてくれ、
こちらの要求にてきばきと応じてくれた。

このパーティーにはその他、研究室のスタッ
フが多勢来ていた。R. Brown もその一人で彼に
はこのとき初めて逢ったのだが、向うから近か
寄って来た。「私はあなたの Words and Thin
gs を大学院の学生のときのセミナーで読んだ」
といったら、「英語か日本語か」というので
「英語でだ」といったら、とても喜んでいた。
このことをきっかけに、先に述べたように彼に

仕事を頼まれることになった。

知覚研究をしている Green 教授もきており、彼は昨年オックスフォードへ行ってたというのでピーターの話をしたら、彼もピーターのところにいたのだといってオックスフォードのことを懐しがった。

その他、町の名士らしい人も来ており、「ボストン交響楽団の Seiji Ozawa はすばらしい」などという話も出た。

ここでも日本に対する関心は大きく、ことに私の家内などは「あなたの英語はわかりやすい」などとお世辞をいわれていた。

W.J. ホールの同じ15階の住人、社会学の Stone 教授（彼はよく顔を合わせるのに、いつもむっつりしており、このとき初めて話をした）はこの家は William James の家だったのだと教えてくれた。少し前まで彼の孫が住んでいたのを Estes 夫妻が買い取ったということだ。三階建のアメリカ風の建物で、パーティーは一階であったが、二階の寝室でコートをぬがされた。一階にはさすがに机の上の心理学者らしく、本がぎっしりつまっていた。帰国時にコロラド大学の Mike Wertheimer (Max Wertheimer の息子)を訪ねたとき、彼がいうには（彼もハーバートにいたことがある）、その地下室で Thorndike が実験をしたはずだといったがこれの真偽のほどはわからない。

暖房は入っているが暖炉に Estes 自身がマキをくべ、赤々とした光はクリスマスの雰囲気を出していた。

まだ雪の降る中を Estes 夫人に送られて帰った。

6) 食事に招待

1) ステーブ夫妻

ケムブリッジに到着早々、W.J. ホールから車

で荷物を運んでくれた主任研究員のステーブ夫妻をランチに招いた。雪の降った翌日だったが、丁度彼らはボストンの街の中から、われわれのアパートの近くに引越してきたばかりであった。

二人は長いブーツをはいてきたが、ドアをあけるとすぐにそれをぬぎはじめた。ジェリーから日本の習慣を教えられたらしい。

ランチだが、ここでは日本食の材料が手に入りやすいので、テンプラ、スキヤキ、ヤキトリなどを御馳走した。しかし彼らはランチではそんなに食べないといって少しずつ食べただけである。事実ステーブなどは研究室でバナナ一本とリンゴを机の上において、これがランチだといって、食べながらコンピューターを操作していることがよくある。彼らがいうには朝はトーストと果物、コーヒーで夕食の量もさして多くないという。厚いピフテキを食べているように聞いていたのとは大違いである。「日本人はよく食べる」と逆にいわれた。「それではあなたたちがそれほどタフに仕事ができるのはどうしてか」と聞いたら、「多分コーヒーのせいかもしれない」ということであった。

ジャネットはハーバートの商店街の一角にある一寸かわった家具調度品を売っている店に勤めているが、クリスマス前などは夜も忙しいということであった。次の新学期からはハーバートのビジネス・スクールに入って商売の勉強をするということであった。

II) ジェリー夫妻

彼らもドアを入るとすぐにブーツをぬいだが、スリッパが用意されていたので「なるほど」と感心していた。ニュー・ヨーク州製の上等のシャンペンを抜いたら大いに喜んでくれた。だいたいジェリーはそう病的なところがあるようで、研究室に朝きたとき、秘書と大声でしゃべっているのが隣室からよくきこえる。そこへ入って

いくと「Oh / Famous Professor Fujii /」など
といていただきついてくることもある。

ステーブ達のとくと同じようなランチだが彼
らもあまり食べない。Natsume の “Kokoro” を
読んだとか（この英訳本は日本でもよい評価を
受けている）、Doi の Amai も読んでおり、
“Amai”, “Honné”, “Tatemaš” などというが、
はじめはそれが英語だと思ってしまったので何
をいっているのかわからなかった。

ジェリーは現在、北海道大学と共同研究して
いるが、彼のモットーは hard work と他人の新
しい説にはどんなことでも耳を傾けるというこ
とだけあって、日本のことについても大変興味
を持ち、勉強しているようである。

Hard work というのはハーバートのどこの学
部でも共通しているようで、とにかくここでは
皆がよく仕事をし、勉強している。ときには昼
休みの時間も惜んで、また夜遅くまで仕事をし
ているものもある。その点オックスフォードで
はやるときにはやるが、ティー・タイムとかラ
ンチ・タイムはきちんととって夕方からはほと
んど仕事をしないというのとは異っている。

ジェリーは「日本人は Honn'e と Tatema'e と
を使い分けるそうだが、それではあなた方は何
を信ずるのか？」と聞いた。とっさには答えら
れないと夫人がいろいろと解説してくれるが話
はかえって複雑になる。われわれも例を示して
「アメリカ人でも同じではないか」というが、
それがよくわからないらしい。後で考えてみる
とこれは実に面白い問題であるが、もっとよく
考えてみなければならぬ。要するに彼らは
「日本人はうそをつく。つまり、考えているこ
とということとがちがう。」ということらしい。
質問紙法の発達しているアメリカでの調査が、
そのまま日本で行われるとしばしば異った結果
のでてくることがあるが、そういうこととも関

係するかを聞いたたら、「そうだ。」と答えていた。

iii) ユーフー

北京のアカデミーから来ている彼女は、指導
教授がジェリーであるので、彼女の専門は社会
学であるが、ジェリーのセミナーにはいつも彼
の横に坐っていた。ジェリーのディナーで一緒
になってからは、ときどき話をするようになった。

彼女は大学の寮に住んでいるが、片足を少し
ひきずって歩くので、夕食に招待した日は丁度
大雪であったから、どのようにしてわれわれの
アパートに来て、帰えるのか心配していた。彼
女の話では大学の身障用専用バスが、電話一本で、
で、いつ、どこへでもドアからドアまで運んで
くれるのだという。こういうサービスがいきと
どいているのはうらやましい。学ぶことを欲す
るものにはその欲求が充たされるような環境を
整えるということはあたりまえのことだが、ま
だなかなか実現されているところは少ない。

彼女は基本的単語だけで実に上手に英語を話
す。少し難しい単語になるとわからなくなるが、
それも説明するとよくわかる。

文化大革命で苦勞したこと、スキ焼は母に聞
いたことがあること、丁度正月（中国では旧正
月）近くで、日本とよく似た習慣のあることな
ど話がはずみ、冬休みを利用して、仲間達と東
海岸からフロリダを廻って西海岸までドライブ
し、様々の驚きを経験し、それらをわれわれと
同じように多くの写真に撮ってきたのを私達に
みせてくれるのであった。

iv) Bogorad 教授夫妻

生物学者の彼は遺伝子に関する会社を二つほ
ど経営しているという。いかにもアメリカらし
い話だ。白系ロシア人で、夫人が小学校の先生
である点はジェリーの夫人と同じである。

小学校の先生の英語はとくにわかりやすい。

彼らは京都に来たことがあり、“大文字”をみたことなど話はずんだ。ディナーに招いたが内容はランチの場合と同じであり、ジェリー達があまり食べなかったのに比べ、彼らは実によく食べてくれたので気持ちがよかった。

V) Lada 一家

生物学者の彼はチェコからの亡命者であり（チェコからは今でも税金の請求がくるそうだ）、カナダに渡って夫人と結婚した。夫人も今はカナダ人だが父母がポーランドから亡命したとのこと。彼は東北大に留学したことがあり、日本人の特徴として“いねむり”（大学院の試問中にもいねむりしている教授がいたということ）、と“水虫”をあげ、水虫の薬をとり出して来た。

その後、彼らの家にも招待してくれたとき、近くの Walden Pond（思想家 Henry Thoreau がこの近くで思索した）は凍っていた。

VI) Dick 一家

同じく生物学者の彼はサンフランシスコで結婚し、南部、東部へと移動してきた。

夫人はサンフランシスコ出身で、同じカルフォルニア州のロサンジェルスが悪口をいう。しかし Dick の話ではロス出身者はロスの自慢をし、サンフランシスコの悪口をいうのだということだ。

彼が南部に移ったときには“culture shock”を受けたといったのには驚いた。

私が外国に出かけるときの一つの興味は“甘え”の著者のいう“culture shock”をどのように体験するかということであった。それがアメリカ人がアメリカの中を移動してそれを感じたというのだから面白かった。

彼らには小さい子どもが二人おり、奥さんが洋服店につとめている間（夕方から夜にかけて）、二人の子どもの面倒をみている。彼がいうにはアメリカで大問題になっている“ホモ・セクシ

ャリティ”は父親の子どもへの働きかけが足りないからというので自分もよく子どもの面倒をみるのだというので、そのことはだれか心理学者がいったのだろうといったら、“そうだ”といって大笑になった。だいたいアメリカ人は心理学者のいうことに素直に反応するところがあるようだ。

その後、彼らの家に招かれたときに、その家が丁度2つの学区の境界線にまたがっており、子どもをいずれの学区に入れるかを決める時、子どものベッドがいずれの学区に入っているかで決められるということで、よい方の学区に入る部屋に子ども部屋を移したという話を聞いた。

VII) バーバラ

彼女はラッツガース大学の生物学の助教授で現在休暇をとって Bogorad の研究室に来ている。心理学者の夫とは離婚したという。ハーバートの教授の冷めたいというを示す一つのエピソードを聞かせてくれた。ハーバートの教授の息子とこの近くの女子大の教授の息子の二人が無免許運転で事故を起し、大怪我をしたとき、女子大教授の方は連絡したら、すぐとんできたのに、ハーバートの教授は翌日になってはじめて来たというのであった。

彼女は帰り際に、彼女が以前かぶっていた古い帽子を記念にと家内にくれた。

7) 近所の老婦人

ハーバートに来てから、まもなく、私の息子達の小学校に Fall Foliage Trip（紅葉狩）という広告がでていた。だれでも参加できるというので申し込みに行ったところ、この地域の学校終了後の諸活動（老人や小学生を相手にいろいろな活動をしている）の責任者の婦人が、これは老人会のためのものだと言ったが、しかし折角日本から来ているのなら、バスに余席があれ

ば電話をくれるとのことであった。結局少しの余席があったので、二人で来ないかと誘われて、定刻に小学校の前までいったら、30人ほどの老婦人ばかりで、いささかおじけづき帰えろうと思ったが、折角の機会だからと同乗した。約一時間ほど行ったところの古いレストランで昼食。池のほとりの紅葉を楽しんだ。葉はカナダの国旗と同じ大柄なものであるが、池の周囲の紅葉の光景は京都でよくみるものと大変よく似ていた。四人の老婦人と同席。

老人達の話はゆっくりしていて大変わかりやすい。話ははずんで、日本の話をするると大変喜んで聞いてくれた。

みな一人暮らしだが、それぞれ仕事を持っている。例えば献血の手伝いとか、民宿とか、音楽を教えるとか。そして一緒に教会に通ったりしている。

その内の二人は私の息子達の小学校 (Peabody School) の出身だというので驚いた。この小学校は創立100周年で数年前に改築されたそう。その一人アイリーンはスイス人と結婚し息子も大きくなったのに今は二人とも亡くなって民宿を営んでいる。アイランド出なのでJ.F.ケネディーの熱心なファンである。ケネディーはハーバート大を出、ここが地盤であったので、今でも根強い支持が残っている。小学校の事務室にはケネディーの写真が掲げられている。私達もイギリスからアイランドに渡ったことがあるので、その時のことを話をしたら大変喜び、ボストンが京都と



This is to certify that
MINORU FUJII Ph.D.

has participated in the
Harvard Infant Study
under the direction of Jerome Kagan, Ph.D.

at
William James Hall
Harvard University

Signed Jerome Kagan

Date Mar 2 1993

*Anna V. V. V. V. V.
Nancy J. Fog
Allison Rosenberg
Whitney Walton*

*Steve Reynolds
Charlotte Clarke
Mary Smith
J. Diana Rauer
Alice V. Morris*

ケーガン博士の下で、ハーバート乳幼児研究に参加したことの証明書と研究室のメンバーのサイン

姉妹都市であることもここで初めて知った。彼女は一度ケネディー図書館へ連れていってあげると約束した。だいたい、イギリスでも、アメリカでのその場の約束が果されることは滅多にない。しかし帰国も直前にせまったある日、一通の手紙が届いた。アイリーンからのものである。「もしよければケネディー図書館へ連れていこ

う。貴方たちとの約束は決して忘れてはいない。」
というものであった。

約束の時間に彼女は自分の車を小学校の前に
止めて待っていてくれた。

車で約40分、初めはハーバート近くに建てら
れる予定が、マサチューセッツ大学の敷地内の
海岸べりに建てられたケネディー図書館は彼に
関する資料をほとんど収めている。

大統領の生涯という映画もあり、彼女はたび
たびみたので、あなたたちだけで見てきなさい
といって、彼女はししゅうをはじめた。それは
ケネディーが大統領執務室で使用していた椅子
の背もたれにかけられていた布と同じもので、
彼女はこれを何枚も編んではひとにあげている
ということだった。

いろいろな人々との個人的つきあいは、その
国の国柄を裏からも知ることが出来るので、大
変有益である。

8) お別れ

帰国の数日前に、ジェリーの研究室のスタッ
フ全員を家に招待したおかえしに、帰国の前日、

例の私の部屋の向い側の小ホールで私のために
簡単な送別パーティーを開いてくれた。

贈り物としてハーバートの紋入りのカップと
ジョッキ、それに額入りの証明書(写真)に全員
がサインしたものをくれた。私は返礼に皆の名
を漢字で、毛筆書きしたものをあげたら大変喜
んでくれた。

そしてジェリーは私が彼の誕生日に日本語で
お祝いを書いてあげた返礼に英語の詩をかいて
くれた。

From a foreign land you came to US
Under the usual Japanese compliments
Just as we began each other to learn
It has become time for you to return
In harmony, friendship are with all
as good wishes.

